

博報堂教育財団 第15回、16回「日本研究フェロシップ」

成果報告書

I. 研究成果概要

氏名（フリガナ） 在住国名	ウォーカー 泉（ウォーカー イズミ） シンガポール
所属・役職	シンガポール国立大学語学教育研究センター・所長補佐（准教授）
招聘回（招聘研究期間）	第 15 回（2021 年 9 月 1 日～ 2022 年 2 月 28 日）
受入機関	立命館大学
招聘研究テーマ	高度外国人材育成における日本語教育の意義と課題 ー日本に就職したシンガポール人日本語学習者のライフストーリー分析からー
研究目的	本研究の目的は、少子高齢化時代の緊急課題となっている高度外国人材育成を念頭にいた日本語教育の理論と実践の構築に寄与することである。シンガポールの大学で日本語を学び、日本で就職して数年を経た日本語学習者を対象にライフストーリー研究を行い、本国でどのように日本語を学び、就職後日本語とどのように関わってきたのかという成長のプロセスを、学びの過程で選択していく行動、生じる感情や認識、その背後にある価値観や信念との関連で明らかにしていく。さらに、習得を促進する要因と阻害する要因についても探る。以上の結果を踏まえ、日本語教育の在り方と取り組むべき課題を提言することが本研究の目的である。
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか（具体的に）</p> <p>本研究では、調査協力者に半構造化インタビューを行い、TEA（複線径路等至性アプローチ）を用いて分析した。立命館大学総合心理学部教授の安田裕子先生とサトウタツヤ先生からご助言をいただいたり、ゼミや研究会へ参加したりして、TEAについて理解を深めると同時に、下記の方法で研究を進めた。</p> <p>（1）調査対象者6名へのインタビューと文字化</p> <p>非構造化インタビューを行い、日本語を学んだ動機や履修し続けた理由、日本で就職するに至った経緯、日本語習得上の問題、就職後の日本語との関わりなどについて尋ねる。</p> <p>（2）TEM/TLMG図作成</p> <p>必要な概念を用いてTEM図を作成し、各3回ずつのインタビューを通して協力者と共有しながら完成する。</p> <p>（3）全TEM/TLMG図の合体</p> <p>多くの人々が共有する必須通過点が何であるのか、意味のある分岐点、個人間の差を特徴づける分岐点が何であるのか、その促進・疎外要因は何か、そうした行動変容をもたらしたのは価値観や信念とは何かなどを検討し、高度外国人材として成長していく過程を通時的に描く。</p> <p>（4）考察とまとめ</p> <p>高度外国人材育成における日本語教育の意義と課題について考察し、まとめる。</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか（具体的に）</p> <p>本研究を通して、日本で就労しているシンガポール人日本語学習者が、本国でどのように日本語を学び、就職後日本語とどのように関わってきたのかを、学びの過程で選択していく行動、生じる感情や認識、その背後にある価値観や信念との関連で明らかにすることができた。その結果、日本語学習者の言語観は、「こ</p>	

とばは、人と人をつなぐもの」「ことばは、情報を伝達するためのもの」という二つに大別されること、日本語の習得を促進するためには、前者の言語観を持ち、言語行為の観察を通して気づきを得ることが重要であることが考察された。さらに、習得を促進する要因と阻害する要因についても探ることにより、日本語教育の意義と解決すべき課題も見出された。

研究方法として複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) を用いることにより、言語の習得プロセスに関わる複雑な分析と記述が可能になっただけでなく、卒業生たちの Life (人生、生活、生き方) についても理解を深めることができた。それぞれが複数の選択肢による緊張関係の中で悩みながらも、最善の道を歩むべく懸命に生きていること、また、日本語は大学の選択科目の一つでしかなくとも、彼らの将来に大きな可能性を秘めていることもわかった。

以上の結果から、日本語教育には多大な意義があると言えるが、取り組むべき重要な課題も見出された。それは、日本語学習をコミュニケーションのツールの習得として終わらせることなく、言語の社会文化的な側面も理解でき、その重要性を認識できるような学びにしなければならないということである。それにより、より良い人間関係の構築・維持をはじめ、平和で安全な社会を築いていくためのコミュニケーションとは何か、それはどうやったら実現できるかに理解を深めていくことができるからである。それは、人間関係や場を重視する日本語の教育だからこそ実現可能であり、そういった認識をもって教育に取り組むことが重要であるという提言に至った。

3. 研究成果 (予定を含む)

○論文 (題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略 (200字以内))

・ e-FLT (electric journal of foreign language teaching)、ビジネス日本語学会誌、心理学関連学会誌等に投稿予定

○口頭発表 (題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略 (200字以内))

以下は全てオンラインで開催された。

(1) 「企業・日本人大学生との連携強化をめざしたカリキュラムデザイン」(2021年11月23日。ベトナム日本語教育国際シンポジウムにて招聘パネリスト)

高度外国人材の育成をめざしてシンガポールの大学で開発、実践されてきたビジネス日本語教育について報告することにより、日系企業との連携の重要性や、日本語学習継続への動機を高め、現実社会で生かせるという実感がもてるようなカリキュラムについて提案する。

(2) 「大学のビジネス日本語教育における面接指導—企業との連携による教育実践—」(2021年12月10日シンガポール日本語教育セミナーにて口頭発表)

日本語非母語話者の就職面接に関する先行研究では、日本語教師と教師以外の日本人や企業人では学習者の発話に関する評価や印象が違うということが指摘されてきた。そこで、本研究では就職面接の準備を目標とした大学のビジネス日本語コースにおける面接指導を、企業側の就職面接の専門家と連携した取り組みについて報告することにより、高度外国人材育成のための教育のあり方について検討する。

(3) 「TEAの最新動向；想像/構造力、転結・関係構造との関係を中心に」(2022年1月29日～30日対人援助学会第13回大会にて企画コメンテーター)

フランスの哲学者・シモンドンの展結 (transduction) ならびに個体化 (individuation)、日本の心理学者・松村康平による関係学、スイスの文化心理学者・ジットゥンによるイマジネーション (imagination/想像力)、という3つの考え方を TEA (複線径路等至性アプローチ) に組み込む可能性を論じる。本ワークショップではサトウタツヤによる概説のあと、土元哲平「日本人学校の初任教員の移行過程と展結」、杉本菜月「裁判員裁判のサブシステムの関係変容を関係学で表現する試み」、市川章子「日本語指導が必要な児童生徒の語りをイマジネーションで表現する」、という3つの話題提供がなされ、小澤伊久美とウォーカー泉によるコメントが討論の口火を切ることになる。

(4)「高度外国人材の日本語コミュニケーション能力習得を促進するための日本語教育の役割—複線径路等至性アプローチに基づく考察—」(2022年2月13日立命館大学人間科学研究所年次総会にてポスター発表)

本研究では、シンガポールの大学を卒業し、日本で数年間就労している高度外国人材6名を対象に調査を行い、複線径路等至性アプローチ(T E A)を用いて日本語の習得プロセスを描き出した。そして、どのような価値観・信念や行動、および、社会的・文化的な諸力が日本語コミュニケーション能力の習得を促進しているかについて検討した。その結果、言語を人間関係の構築と関連づけて捉えている言語観と、言語行為を観察、模倣できる力、周囲との関係性などが習得に影響を及ぼしていることが考察された。

4. 今後の活動予定

本研究を投稿論文として執筆することが直近の課題である。また、3月から滞在しているペンシルベニア大学やウォルトンビジネススクールで日本語を学んでいる学生たちにも同様の調査を行い、本研究で明らかになったことを検証したり、更に発展したりできるよう研究を続けるつもりである。さらに、これまで行ってきたペンシルバニア大学の日本語クラスだけでなく、プリンストン大学、コーネル大学などでも見学させてもらい、より良いビジネス日本語教育の構築に役立てたいと考えている。7月1日からはシンガポール国立大学に戻り、語学教育研究センター所長として管理職が始まるが、引き続き本研究の成果が最大限に生かせるよう教育と研究にも尽力する所存である。